



静岡県文化プログラム成果報告書
2015-2021

地域とアートが共鳴する



静岡県文化プログラム成果報告書
2015-2021

地域とアートが共鳴する

目次

ごあいさつ	3
静岡県文化プログラムの基本方針	5
静岡県文化プログラムの歩み	6
特別鼎談 静岡県文化プログラムを振り返って	7
静岡県文化プログラムの成果	13
アーツカウンシルしずおか	21
写真で振り返る文化プログラム	23

ごあいさつ



オリンピック憲章には、「オリンピズムは、スポーツを文化、教育と融合させ生き方の想像を探求するもの」と謳われ、開催都市が「文化プログラム」を開催するよう定められています。

2012年のロンドンオリンピック・パラリンピックでは、開催都市ロンドンだけではなく、イギリス全土で文化プログラムが展開され、大きな成果を上げたと言われています。東京2020オリンピック・パラリンピックについても、日本全国で「文化プログラム」を展開する方針が採択されたことを受け、2016年5月に静岡県文化プログラム推進委員会が設置されました。「地域とアートが共鳴する」をテーマに掲げ、今世界的に評価が高まっている静岡県の舞台芸術SPACによる「全国的プログラム」、推進委員会と県内の文化団体が連携して開催する「県域プログラム」、市町や団体等による「地域密着プログラム」の三つのカテゴリーで構成され、独自の認証制度を活用し、のべ1300以上のプログラムを認証し、県内各地での展開を推進してまいりました。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、プログラムの延期や縮小を余儀なくされましたが、こうした中であっても、文化芸術の灯を消してはならないと実施団体が様々な工夫を重ね、また経済界をはじめとする多くの皆様の協力を得て、無事プログラムを実施できたことを改めて感謝しております。そしてこの後「アーツカウンシルしずおか」にレガシーとして引き継がれることになったことは静岡県の文化の発展に大きな成果となったことを実感しております。

この報告書では、5年余りにわたり展開された静岡県文化プログラムを振り返り、その実績と成果をまとめました。文化プログラムを契機に、今後静岡県の文化芸術がより一層豊かに花開くことを心より願っております。

結びに静岡県文化プログラムの推進にご協力頂きました全ての皆様に心より敬意と感謝を表しましてご挨拶とさせていただきます。

静岡県文化プログラム推進委員会 委員長 **鈴木 壽美子**



東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は、世界中に喜びと感動をもたらしました。本県も自転車競技の会場地として「スポーツの祭典」を盛り上げただけでなく、多くの皆様の力を結集し、県内各地で展開した静岡県文化プログラムは、「文化の祭典」として大きな成果を収めました。

2014年秋の全国知事会議での提言を踏まえ、本県は、2016年度に全国に先駆けて静岡県文化プログラム推進委員会を設置し、翌2017年度から本県の豊かな自然・歴史・文化等を生かした多彩なプログラムを展開してまいりました。

文化芸術団体が主体となり、本県ならではの魅力に溢れたプログラムが創造され、その作品に触れて文化芸術の素晴らしさを体感する機会が創出されたことは誠に喜ばしいことでもあります。

また、推進委員会による支援を通じ、文化芸術をまちづくりや観光、国際交流、福祉、教育、産業など社会の様々な分野と結び付け、地域の魅力の発信や社会課題への対応を目指した先駆的な取組が次々と生まれたことは、本県の文化振興の新たな道筋をひらくものとして、大変意義深いものであります。

静岡県文化プログラムを通じて培った支援の仕組みは、2021年1月に設置した「アーツカウンシルしずおか」に継承し、誰もが持つ創造力が活かされる道をひらき、様々な分野でイノベーションが生まれる創造的な地域づくりを進めることで、世界に輝く「ふじのくに芸術回廊」の実現を目指してまいります。

結びに、本プログラム推進委員会の鈴木委員長をはじめ、静岡県文化プログラムという文化芸術の未来を創る取組に、多大なる御尽力をいただいた全ての皆様に深く感謝申し上げます、ごあいさつといたします。

静岡県知事 川勝 平太

静岡県文化プログラムの基本方針

テーマ 静岡県で展開される文化プログラム全体に共通する考え方を表しています。

地域とアートが共鳴する

目的 文化プログラムの推進を通じて、以下の実現を目指します。

- 県内の潜在的な文化資源、地域資源、人的資源などを目に見えるかたちで示します
- 他者との違いに価値を見出し認め合う環境を育みます
- すべての人々が持つ創造性に基づく多様な生き方の可能性を提起します
- 文化・芸術を、地域的・社会的課題への対応に生かします

取組のポイント 以下の点を重視して文化プログラムを推進します。

- 多様性：地域、社会、時代、分野、国籍等における多様性を生かした展開
- 多極性：大規模・一極集中的なプログラムではない、県内各地の潜在的な文化資源を生かした多極的な展開
- 持続性：一過性のイベントではない、2020年以降を視野に入れた持続的な展開

取組目標 以下の目標に向けてプログラムを推進します。

1 人材の活用・育成に関すること

- 実践的専門家による文化・芸術活動支援
- 実践的専門家による文化・芸術活動を活用した社会的課題対応への支援
- 実践的専門家やプログラムの担い手の育成

2 仕組みに関すること

- 文化・芸術活動支援、文化・芸術活動の社会的課題への対応の基盤となるネットワーク形成
- 文化・芸術の振興と地域協働のための新たな専門組織（例：地域版アーツカウンシル）の設置・運営

3 人材と仕組みの応用に関すること

- 県内各地における文化・芸術活動を応用した地域・社会課題解決への取組
- 伝統的文化、伝統的産業の掘り起こし、継承と今日的活用
- 文化・芸術とスポーツの連携による新たな取組の提案
- 交流人口の拡大による、人口減少等の課題への対応

静岡県文化プログラムの歩み

- 2013年9月 東京が2020年オリンピック・パラリンピック夏季大会の開催都市に決定
-
- 2014年11月 川勝知事、全国知事会で2020年文化プログラム全国展開提案
-
- 2015年11月 文化プログラム「静岡県準備委員会」発足
-
- 2016年5月 静岡県文化プログラム推進委員会発足
-
- 2020年3月 新型コロナウイルス感染症の影響により
IOCが東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の1年延期を決定
多くの文化プログラムが中止・延期を余儀なくされる
-
- 2020年4月 緊急事態宣言（4月16日から5月14日）
-
- 2020年10月 静岡県文化プログラムリスタートセレモニー
-
- 2021年1月 「アーツカウンシルしずおか」設置
-
- 2021年7月 第32回オリンピック競技大会開会（7月23日～8月8日）
静岡県内では自転車競技（ロード、マウンテンバイク、トラック）を開催
-
- 2021年8月 まん延防止等重点措置（8月8日～8月19日）

東京2020パラリンピック競技大会開会（8月24日～9月5日）
静岡県内では自転車競技（ロード、トラック）を開催

緊急事態宣言（8月20日～9月30日）
-
- 2021年9月 静岡県文化プログラム 終了

静岡県文化プログラムを展開



静岡県文化プログラムを 振り返って

東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせ、全国をリードする形で実施された「静岡県文化プログラム」。そして、そのレガシーとして新設された「アーツカウンシルしずおか」。それぞれの設立と運営に深く関わる、川勝平太 静岡県知事、静岡県文化プログラム推進委員会 鈴木壽美子委員長、アーツカウンシルしずおか 加藤種男アーツカウンシル長に、その成果と今後の取り組みについて語っていただいた。

聞き手：静岡新聞社 文化生活部長兼論説委員 橋爪充氏

「静岡県文化プログラム」の意義と成果

橋爪 世界中に感動を与えた東京オリンピック・パラリンピック競技大会が9月5日に閉会しました。大会の開催に合わせ、静岡県では全国に先駆けて「文化プログラム」に取り組んできましたが、この「文化プログラム」のコンセプトや内容とはどのようなものだったのでしょうか。

知事 2012年のロンドン大会では、文化プログラムが大成功を収めました。

通常、我々はオリンピックをスポーツの祭典だと捉えますが、そうではなくて、“Fundamental Principle of Olympism”には、オリンピックというのは生き方の哲学であり、スポーツと文化、この両方の祭典であると謳われています。それを受けて、2014年11月の全国知事会でオリンピックの話が出たときに、私はイギリスの

例に倣ったらどうかと提案しました。北は北海道から南は沖縄まで、日本全体を Exhibit(展示)する文化プログラムを実施したらどうかと。それがきっかけです。その後、これは国の方針にもなりました。静岡県では2016年5月に静岡県文化プログラム推進委員会という組織を作り、鈴木壽美子さんに委員長になっていただきました。さらに加藤種男さんという逸材が県のお手伝いをしてくださることになり、「静岡県文化プログラム」が走り出したわけです。これは結果的に大成功だったと思います。この厳しいコロナ禍の状況で、よくここまで志を曲げず、人の心を励まし、勇気を与えることが大切だと信じて「文化プログラム」を推進してくださった。お二人には、感謝の言葉もないくらいです。ありがとうございました。

橋爪 静岡県文化プログラム推進委員会のテーマ、プログラムとはどういったものだったのでしょうか。

鈴木 静岡県文化プログラム推進委員会では、東京オリンピック・パラリンピックに向けて“地域とアートが共鳴する”というテーマを掲げ、プログラムを三つのカテゴリーに分けました。一つは今や世界的に評価されている舞台芸術である SPAC による「全国的プログラム」。それから推進委員会と県内の文化団体が連携して開催する「地域密着プログラム」。さらに市町や各種団体等による「地域密着プログラム」。これは静岡県独自の認証制度を設けまして、その活用を広く呼びかけました。その結果、延べ1300件以上のプログラムを認証し、県内各地で多



宮城聡演出 SPAC公演『アンティゴネ』 ©Y.Inokuma



左から 川勝 平太 静岡県知事、静岡県文化プログラム推進委員会 鈴木 壽美子委員長、アーツカウンシルしずおか 加藤 種男アーツカウンシル長

くの文化プログラムが展開されました。

橋爪 舞台芸術あり美術あり、それから文学や音楽もありますが、知事がこの中で特に印象に残ったものは？

知事 まず「全国的プログラム」では SPAC の『アンティゴネ』は素晴らしいものでした。日本の心がしっかり入っています。ギリシャ悲劇をこのように解釈した宮城聡さんはやはりすごいですね。他には磐田市の佐藤典子さんという素晴らしい舞踊家の先生が、アジアの舞踊と音楽に詩を入れ込んだ『ララバイ』という公演

を指導されました。会場が興奮と感動に包まれて非常に美しいものでした。「地域密着プログラム」としては掛川のお茶を軸にした『かけがわ茶エンナーレ』が印象に残っています。

マリナートで上演された『ふじのくにものがたり』も素晴らしかったです。かぐや姫が、霊峰に帰るという大岡淳さんプロデュースの作品で、演劇と音楽がダンスと一体となり、フィナーレを飾るにふさわしいものだと思います。まさに『ふじのくにものがたり』として、永遠に語り継がれるような、そんなプログラムだったと思います。

延べ 1300 件以上の文化プログラムを認証

橋爪 こうしたプログラムの実施によって得られた成果について、どのようにお考えですか。

鈴木 「地域密着プログラム」では『富士の山ビエンナーレ』や、大井川鐵道の『無人駅の芸術祭』もとてもユニークで素晴らしかったと思います。また『かけがわ茶エンナーレ』は地元の皆さんの協力と熱意で、町中で応援しているということが、ひしひしと伝わってきました。どこへ行っても家をオープンにして、「お茶を飲んでいってください、見ていってください」という感じ

で、“地域とアートが共鳴する”ということが具現化されていると嬉しく思いました。

橋爪 「文化プログラム」は地域の人掘り起こしやネットワークにも影響を与えたと思いますが、文化芸術の社会的価値というものはっきり世に示すという意味でも、これは役割として大きかったのでは？

鈴木 「県域プログラム」では、推進委員会が主になっているいろいろなところに呼びかけて、六つのプログラム



を作りました。その中の一つが『手の愉悦～革新する工芸』展です。これは伝統工芸作家と学生とがコラボをするという企画ですが、これもコロナで延期になっていたところ、去年の10月にリスタートを飾ることができ、本当に涙が出るほどの嬉しい再開となりました。学生たちが一生懸命手伝ってくれたということが印象に残っています。

それから先ほどの『ふじのくにものがたり』ですが、これも延期になった間にアーティストやプロデューサーから毎日のように「どうなるのですか」「いつできるのですか」と問われて。私は、どんなに延期になってもこれは絶対にやりますからと言って一生懸命励ましてここまでやってきました。皆さん大変だったと思いますが、最終的に永久に残るであろう舞台になりました。本当に画期的な作品だったと思います。

また今回厳しい状況の中、協力をお願いした経済界の方々には本当にお世話になりました。予算面だけではなく、こういう舞台を是非会場で見たいと思いましたが、大勢の方に見ていただき本当にうれしく思いました。今後の静岡県の文化の発展につながることを願っております。

また「文化プログラム」が無事に展開されたことだけではなく、教育や福祉や企業など社会の様々な分野とつながりができたという意味でも大変意義のあるプログラムだったと思います。

橋爪 加藤アーツカウンシル長は長年企業のメセナ活動に携わり、東京都、横浜市などにおいても活躍の実績

芸術文化は当たり前過ぎるくらい重要なもの

があった中で、2018年の7月から、こちらのプログラムに対してチーフ・オペレーティング・ディレクターとして関わっておられます。その立場から、静岡県の「文化プログラム」とはどのようなものだったかお聞かせください。

加藤 プログラムの数がとても多いということが素晴らしいですね。これだけ全県くまなく、そして幅広いテーマで芸術文化活動を展開している県は、他にないかもしれません。また、質的にも静岡県が全国に誇れるプログラムはいくつかあるのですが、その一つがSPACですね。SPACは国際的な評価を受け、2017年にアヴィニヨンの演劇祭のメイン会場である法王庁中庭でオープニングを飾ることができました。その国際的な評価・水準をどのように担保しているかという点、実はSPACは劇団でもあるのですが、専用の劇場を持っています。つまり、劇場と劇団が一体化している状態ですね。これは世界の演劇界では普通のことなのですが、日本では珍しい。民間では、例えば宝塚や歌舞伎のような劇場の例はありますが、公立の文化施設と劇団が一体化している例というのはほとんどありません。企業活動に例

えるなら、自社製品を自社の工場で作るという当たり前のことが一般にはあまりされていない。それを静岡県は早くからSPACという形で推進してこられているわけです。ここに新たに「文化プログラム」という形で様々な県民主体の活動も一緒にやっていこうという展開をされたのが素晴らしいですね。これだけの活動を展開しておられるところに、ささやかながら末席に加えていただき、非常に誇らしく思っております。

コロナ禍で再発見もあった「文化プログラム」

橋爪 新型コロナウイルス感染症の影響により、延期ないしは中止というようなプログラムもありました。コロナ禍において文化芸術というのはどのような役割があったのでしょうか。

知事 文化というものは特別なものではなく、基本的には“Way of Life”、生き方や生活様式なのです。「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」といえばアメリカの生活様式。アメリカの生活様式に憧れるから、皆さんア



舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」

アメリカに行かれるわけです。文化の一番の基礎は、実は生活だと思います。東京の生活と静岡の生活は違う。静岡には「静岡ウェイ・オブ・ライフ」がある。コロナによって生活が制限されましたが、巣ごもりで自分の生き方を表現できないときでも、芸術家は心の形を音楽で表したり、演劇にしたり、あるいはポエムにしたり、舞踊にしたり——芸術によって、人々は芸術家の心と共鳴できる。共鳴することによって、人の心は通い合います。コロナ禍という厳しい生活を強いられる中で、心の飢えを癒す働きが、芸術文化にある。芸術や文化というのは、人間が生きる上で当たり前過ぎるくらい重要なものだと思っています。

橋爪 県として困窮するアーティストたちへの支援を制度として打ち出していますが、そのあたりについてお聞かせください。

知事 “社会がアーティストを、アーティストが社会を”という双方向のやりとりが大切です。アーティストによって日常生活をされている方が癒やされる。また、その人たちがアーティストを支える。この双方向性のパイプをなるべく大きくする、というのが我々の役割ではないかと思っています。

橋爪 その考えのもとに「エールアートプロジェクト」

という施策を立ち上げ、新しい生活様式に即した新しい芸術の表現というものを支援されてこられたわけですね。プロジェクトについて詳しくお聞かせください。

知事 例えばイギリスのコッツウォルズに行くと、そこにあるのは生活だけです。その暮らし方に人は憧れて訪れます。また迎える側では、生活している場所や生活の仕方が人を惹きつけることに誇りをもって生きています。芸術家は、そういう基礎的な文化のいわば花の部分ですね。ところが茎の部分、根っこの部分、土の部分というものがあるのはじめて花が咲くわけです。支



える人たちがいないと花は咲きません。その両方が必要だということで、このプロジェクトを立ち上げたのです。

橋爪 コロナ禍で「文化プログラム」にも大きな影響、困難があったかと思いますが、鈴木委員長はどのように感じておられますか。

鈴木 2020年の春から、ほとんどのプログラムが中止・延期・縮小され、文化の火が消えるというのは、こういうことなんだと身に染みて感じました。現場の人たちは本当に生活も大変でしたが、それでも気持ちだけは続けましょう、ということで、皆さんと励まし合いながら続けてきました。一番大変だったのは合唱です。去年の春に『静岡県郷土唱歌を歌おう』という大きな催しをやるつもりで県内の小学生の皆さんに声をかけていたのですが、その練習ができないという物理的な状況になり、しかも合唱が一番いけないという状況でした。大幅に縮小することになりましたが、それでも色々な方の協力もあって開催することができました。また、『ふじのくにものがたり』の中でも合唱の部分だけはどうしても舞台の上に乗せることができず、舞台を横に見ながら袖から合わせて歌うという非常に難しいことをさせていただきました。それから演劇の方たちにも実際には言葉を発しないであらかじめ録音した音声を流したり、踊るときもディスプレイをとりながら踊るなど、工夫をしていただきました。それでもそういうことができたということは、新しい演出方法ができたということで、画期的なことであったと思います。途中で挫折しながらも、方法を変え、皆さんが成功に向けて一生懸命頑張って一つの舞台を作り上げたこと。気持ちがあればできるということを私達は



UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川

本当に実感しました。

橋爪 加藤アーツカウンシル長はコロナ禍において、この「文化プログラム」の意義や果たした役割についてどのように感じておられますか。

加藤 皆さん大変なご苦労があつていろいろな取り組みをされてきたわけですが、一方で、例えば『ふじのくに各流大茶会』というものが開催されましたが、お茶の世界を見ていると、必ずしも大人数ではなく、極論すれば二人でスタートできるわけです。つまり、コミュニケーションが取れる最小限の姿を芸術的表現にしたものというのは、コロナ禍でもできるわけです。私も大茶会を拝見しましたが、普段見られないようなお茶碗など非常に斬新なものが登場し、本当に息をのむ思いでした。

結局、コロナ禍で我々が再確認したのは、芸術文化というのは、必ずしもイベントではないということです。例えばお祭りでは神輿や山車、あるいは踊りといったところに着目されますが、実は一日だけのイベントのように見えて、一年中催事があるわけです。そうした意味で、芸術文化の活動というのは一年中やっていくもの、知事の手紙を拝借すると、まさに生活様式そのものです。その観点から言えば、コロナ禍でもいろいろな工夫の余地はあり、むしろ逆に考えさせられる機会にもなったような気がします。

レガシーとしての 「アーツカウンシルしずおか」設立へ

橋爪 「文化プログラム」のレガシーとして「アーツカウンシルしずおか」が2021年の1月に設置されましたが、この組織のコンセプトや役割とは？

加藤 今まで芸術文化の振興の仕方といえば、文化施設において県民に広く公演や展示を提供し、鑑賞していた

だくことによって、県民の文化度を高めていくという活動が主体でした。これが今後一切なくなるというわけではありませんが、それと連動しつつ、むしろ県民自身が主人公になる主体的な創造活動をどのように応援していくかということが、これからの課題になります。そこで、例えば福祉や教育、場合によっては観光まちづくり、そうした多様な活動を応援していくために、「アーツカウンシルしずおか」が設置されました。最終的なゴールは全ての県民が表現者になるか、少なくとも創造的になる、といったことを目指すべきだと考えています。

興味深いのは、例えば『無人駅の芸術祭』。これはまちづくり団体の方たちが中心になっています。『富士の山ビエンナーレ』は企業の方を含めた地元有志が中心になって運営しています。『かけがわ茶エンナーレ』はもちろん市民と一緒にのですが、掛川市長が実行委員長ですからそういう意味では行政がイニシアチブをとっています。このように主体が様々あることによって、例えば大井川鐵道という産業、『富士の山ビエンナーレ』でいうと浅間大社の湧玉池の湧水、『かけがわ茶エンナーレ』でいえばもちろんお茶。さらには今回会場になった日坂の宿。東海道五十三次の宿場町のようなも



のの価値を、もう一度、我々が再発見・再確認して、そのような資源をどうやって生かしていくかということ、これが実は文化のプログラムで非常に重要なわけです。単に文化のことだけやるわけではなく、そこに着目して地域社会そのものを総合的に活性化していくというのが私どもの目的です。そういう意味で「アーツカウンシル」が、今後頑張っていこうと思います。

目標は全ての県民が表現者になること

橋爪 「文化プログラム」で培った財産が「アーツカウンシル」に引き継がれようとしています。その礎を作られた当事者として、鈴木委員長が「アーツカウンシル」にける期待は？

鈴木 静岡県文化プログラム推進委員会を立ち上げたときの発会式で、知事が、「オリンピックが終着点ではない。その後が続くことが大事だ」とはっきりおっしゃったので、私達もそのつもりで文化の土壌を掘り起こし、耕し、ここまで5年間やってきました。この後、そこに芽が出て花が咲くというところまでを、県民の皆さんと一緒に作り上げていくということが大事だと思います。そのためのネットワーク作りや人材



橋爪充氏

育成を「アーツカウンシル」に期待したいところです。

橋爪 最後に、知事として「アーツカウンシル」に期待することは？

知事 これは「文化プログラム」のレガシーなのです。初代アーツカウンシル長がおっしゃった「全ての人が表現者である」というのは素晴らしい。特別なものではなく全ての人、というのが大切。一人一人がライフスタイルを持っている表現者というわけです。360万人の県民の生き方の全体が「静岡ウェイ・オブ・ライフ」、「ふじのくにウェイ・オブ・ライフ」だと。それが自信になったら素晴らしいと思います。

オリンピック・パラリンピックの成功を糧にして、「アーツカウンシルしずおか」において、もう一度「静岡ウェイ・オブ・ライフ」を発掘していく。これは『第5期 ふじのくに文化振興基本計画』の核心にもなります。加藤さんを全面的に信頼申し上げ、県民と手を携えてやっていただき、行政はその下支えをするという形にしたいと思っております。

静岡県文化プログラムの成果

はじめに

文化・芸術事業を対象とする評価は、創造性を評価する以上、事前にその事業効果・成果を一概に予期できないため、生み出している価値を把握しにくい等の課題から、通常の事業に対して、定量的な指標設定が困難であり、評価自体が非常に難しいと言われてきた。

「静岡県文化プログラム」は、「東京2020オリンピック・パラリンピック」をエポックとした日本で初めてとも言える試みであり、評価についても試行的に取組み、2021年3月に「2019年度 地域密着プログラムを対象とした試行的評価」を行っている。

今回、同プログラムの完了に伴う報告書の作成にあたり、前記の試行的評価を踏まえ、同プログラムの四つの目的の達成を軸に、さらには、静岡県の文化・芸術の振興や地域の活性化等に貢献したかを検証することとする。

静岡県文化プログラムの目的

静岡県では、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムを実施するため、2015年度に準備委員会を設け、県内の文化的資源を抽出し、より多角的なプログラムの構成に向けて「オリンピック文化プログラムに向けた文化資源調査」を実施した。さらに、2016年度に静岡県文化プログラム推進委員会を設置して以降、プログラムの具体的な目的として以下の4点を掲げ、五年間にわたり、一千件を超える文化プログラムを展開した。

目的

- ◆県内の潜在的な文化資源、地域資源、人的資源などを目に見える形で示します
- ◆他者との違いに価値を見出し認め合う環境を育みます
- ◆すべての人々が持つ創造性に基づく多様な生き方の可能性を提起します

- ◆文化・芸術を、地域的・社会的課題への対応に生かします

なお、文化プログラムは、推進委員会で財政的支援を行うプログラムとして、東京2020 NIPPON フェスティバル共催プログラムとして行う全国的プログラム、県内文化団体と協働して実施した県域プログラム、地域団体等が実施する地域密着プログラムの三つのカテゴリーと、財政的支援を伴わないプログラムから構成された。

全国的プログラム

全国的プログラムとして、ふじのくに野外芸術フェスタ2021静岡 宮城聰演出 SPAC 公演『アンティゴネ』を開催した。SPACの『アンティゴネ』は、2017年に、世界最高峰の演劇の祭典「アヴィニオン演劇祭」から招聘を受け、そのメイン会場である「アヴィニオン法王庁中庭」で演劇祭のオープニングを飾った作品である。



ふじのくに野外芸術フェスタ 2021 静岡 宮城聡演出 SPAC 公演『アンティゴネ』 ©Y.Inokuma

今回は、徳川家康が大御所時代を過ごした駿府城跡にある駿府城公園で新緑の季節に凱旋公演となっただけでなく、その約2ヶ月後、同じ場所でオリンピックの聖火リレーセレブレーションが開催されたことを思えば、コロナ禍で開催された東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた大いなる一歩であったのではないだろうか。

県域プログラム

県域プログラムは、2020年以降六つのプログラムを開催した。2020年前半は新型コロナウイルス感染症の拡大により多くのプログラムが中止・延期されるなか、10月9日に感染が一時的に下火となったタイミングを捉え、プログラムを再編成するとともに、でき得る感染対策を施すことで、文化プログラムの再開(リスタート)を宣言し、静岡文化芸術大学と共催で「手の愉悦～革新する工芸」展を開催した。このプログラムは、「ものづくり県」である静岡県にとって、今に続く先端技術のもととなったのは「手

の技」であることから、伝統的技法と現代感覚の融合を試みている工芸作家の作品を展示したものである。また、その後12月に開催した、県内企業の優れた技術を紹介した「先端技術展」と合わせて、産業の持つ創造性や芸術性を新たに紹介することができた。

また、2021年3月に静岡交響楽団、音楽青葉会・静岡児童合唱団及び静岡県文化財団で構成する実行委員会と共催で開催した「静岡県郷土唱歌を歌おう」では、昭和11年発行の「静岡県郷土唱歌」に掲載された県内各地域の名所旧跡や歴史を謳った数々の唱歌を、新たな編曲のもとオーケストラと県民公募の合唱で綴ったものである。埋もれつつあった唱歌という文化遺産を、もう一度、県民の財産として再認識する機会となったばかりか、合唱というコロナ感染リスクが高いジャンルにおいても、適切な対策をとることで公演が可能となることを証明できたプログラムであった。

2021年5月23日に、静岡県現代舞踊協会を中心とした実行委員会と共催で開催した「舞踊と音楽と演劇の祭



「手の愉悅～革新する工芸」展



先端技術展～技人たちの物語



静岡県郷土唱歌を歌おう



忠臣蔵2021

典『ふじのくにものがたり』では、第一部「ふるさとの心を今に…静岡県ゆかりの詩人・作曲家の作品を踊る」、第二部「舞踊音楽劇 かぐや姫、霊峰に帰る」の二部構成で、大柴拓磨、大前光市らをゲストダンサーに迎え、SPAC 俳優・宮城嶋遙加、作曲家・渡会美帆と県内演奏家によるアンサンブル「帆楽伶奏団」、また、友情出演として音楽青葉会・静岡児童合唱団が豪華絢爛な絵巻を舞台上で繰り広げた。郷土に言い伝えられてきた「かぐや姫伝説」等をテーマに、静岡県を代表する舞台芸術家がコラボし、まさに静岡県文化プログラムにふさわしい企画となった。また、舞台上の演者が、録音された俳優の声に合わせて動く他、合唱は舞台上ではなく、舞台袖で行う等、コロナ禍での公演の手法を提示したプログラムでもあった。

6月5日、6日に開催された『忠臣蔵2021』は、世界で高い評価を受けている劇団 SPAC (公益財団法人静岡県舞台芸術センター) と共催で実施したものである。平田オリザの台本・宮城聡の演出で、1999年にシアター・オリピックで初演した作品を、一般公募の参加者

と SPAC 俳優ほか総勢 54 名が、静岡県舞台芸術公園 野外劇場「有度」によみがえらせた。コロナ禍での稽古・公演となったが、感染防止策を演出の一部に取り入れつつ出演者 1 人 1 人の葛藤や成長を描いた舞台は、2 公演とも満席となった。

6月6日に開催された「ふじのくに伝統芸能フェスティバル」は、静岡県文化財団と共催したものである。静岡県は、古くから東海道や海路により都と東国を結ぶ要衝に位置するとともに、南アルプス等の山岳地帯を有することから多彩な伝統芸能が継承されてきた。伝統芸能は貴重な地域の文化資源であり、各地の継承団体が一同に会したことは、それぞれの工夫や努力を共有することができたとともに、コロナ禍における今後の継承を考える絶好の機会を提供することができた。

6月10日から四日間にわたって開催された「ふじのくに各流大茶会」は、静岡県茶道連盟を中心とする実行委員会と共催で開催したものである。言うまでもなく静岡県は全国一の茶所であり、茶を日本に伝えたときれる聖



舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」



ふじのくに伝統芸能フェスティバル



ふじのくに各流大茶会

一國師のふるさとでもある。このプログラムは、日頃別々に茶会を開催している抹茶・煎茶の各流派が一堂に会し、小堀遠州設計の茶室・庭園を復元した「ふじのくに茶の都ミュージアム」で本席・野点・立礼の3席を担当し催した大茶会である。オリンピック開幕直前の時期に、まさに「茶の都」静岡ならではのプログラムとなった。

以上六つのプログラムは、県内の各文化団体を核として、様々な分野が協働するモデルケースとなったことに加え、県内の多彩な潜在的な文化資源を目に見える形で具現化できたと考えられる。

地域密着プログラム

地域密着プログラムについては、財政的支援を行うとともに、推進委員会所属のプログラム・コーディネーターが企画段階から該当プログラムに関わり合い、話し合うなかで助言、提案などを行ういわゆる伴走型支援を行ってきた。

支援を申請する団体に対しては、申請年度の事業目標に限らず数年後までの事業ビジョンの記述を依頼し、審査に当たっても中長期的な観点から事業の継続性・発展性、波及効果等を検討した上で採択している。2017年度から2020年度の間、静岡県内の33の団体に対し延べ70事業の支援を行った。公募の際に、オリンピック・パラリンピックに向けた祝祭性の高い「文化芸術振興事業」と文化の力を地域や社会課題の対応に活用する「地域・社会課題対応型事業」の二つの枠を設け、案件の特徴に合わせて支援を行っている。

地域密着プログラムの特徴の一つは、単年度の支援プログラムでありながら、オリンピック年である2020年を一つの目途に、開始当初から複数年度にまたぐ支援を想定していたところにある。その背景には、文化・芸術事業においては、地域で「芽」が出るまでそれなりに時間がかかるということを前提に、先駆性の高い事業でなおかつポテンシャルが高ければ息長く支えていこうという意図がある。今回のふりかえりにあたって



は、文化プログラムの目的に沿って検証した。

①県内の潜在的な文化資源、地域資源、人的資源などを目に見える形で示す。

潜在的な文化資源等を顕在化することは、地域の文化ポテンシャルを向上させるとともに、今後のアートプロジェクトの多様性や発展性につながるものと考えられる。

地域密着プログラムの中で、この目的を達成した例として、まず「富士の山ビエンナーレ」が挙げられる。このプログラムは、富士市・富士宮市・静岡市の三市にまたがる広域的な芸術祭であり、富士山の景観や、江戸期の建築である小休本陣や明治期の五十嵐邸などの文化財建築という地域の文化資源を現代アートと融合させ展開したものである。プログラムの中心人物は、地域の企業家であり、多くのサポーターが支えている点からも地域の隠れた人材が顕在化したものと言える。

「熱海怪獣映画祭」は、日本の現代文化とも言える怪

獣映画に特化した映画祭であるが、熱海という土地柄、別荘住まいの文化人材と地域活性化を考える地元の人材が協働することで、地元商店街を舞台にした「あたま怪獣まち歩き」や「新怪獣お絵かきコンクール」など映画祭の枠を超えたプログラムとして成功を生んだ。

「CLIFF EDGE PROJECT 躍動する山河」は中伊豆地域を襲った縄文時代の噴火から狩野川台風までの災害という歴史的事実と、そのような自然の力に対する人の祈りをテーマに、縄文時代後期の遺跡や中世から伝わる神社などの文化財を舞台に現代アートを展開したものである。

「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」では、アーティストが現地に数ヶ月滞在し作品制作にあたり、そこに暮らす人々の存在こそが地域資源、すなわち「地域を支える妖精的存在」として価値を見出し、光を当てようとする作品が多く生まれたことも大きな成果と言える。アーティストと地域との交流が生まれただけでなく、交流した「妖精たち(地元の人々)」がボランティアとして、来訪者に湯茶のサービスや、地域・作品の説明



熱海怪獣映画祭



CLIFF EDGE PROJECT 躍動する山河



UNMANNED 無人駅の芸術祭 / 大井川



表現未満、

を自主的に行うなど、地域に暮らす誇りも醸成されるときともに、来訪者との新たな交流が生まれたことも、地域の潜在的な力を引き出した効果と言える。

②他者との違いに価値を見出し認め合う環境を育みます。

福祉と文化芸術の横断的な取り組みが多かったことが静岡県文化プログラムの特徴の一つとも言える。そこでは、一人一人の個性や違いが個の表現として可視化するだけでなく、その表現の周縁の存在（家族など周りにいる人）にまで目を向ける機会をつくったことは、単なる啓発だけに止まらない「環境を育む」ことにつながったと考える。

例としては、特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツのプログラム「表現未満」では、通常、障害者施設への訪問者は家族等に限定されている状況を、文化事業を行うことで多様な他者との交流を生み出し、そのことが、「知らない」ことによる差別や偏見、さらには無関心を防ぐことを証明したと言える。

また、芸術祭や映画祭を通して生まれるサポーター組織も「他者との違いに価値を見出し認め合う環境」の一つである。「原泉アートデイズ！」は、掛川市北部の中山間地「原泉地区」において、アーティストインレジデンスの手法で、現代アートの方で地域の魅力を引き出すことを目的に、多くの住民がプロジェクトメンバーとして参加している。ドネーションの受付、アートストアの運営などに加え、作品制作活動も地域のサポーターが支えており、過疎により薄れていくコミュニティの輪や、アーティストや来訪者との交流が拡大した。サポーター組織は、日頃の消費活動を超えた先で出会う、第三のコミュニティであり、参加したサポーターにとってはその地域における拠り所としても機能している。

③すべての人々が持つ創造性に基づく多様な生き方の可能性を提起します。

いくつかのプログラムは、子育て、防災、生活文化と



原泉アートデイズ！ 2020～不完全性～

いった日常的な活動の中にある創造性を引き出すことで、多様な生き方やあり方を提示した。

特定非営利活動法人熱海ふれあい作業所では、精神障害を持つ若者とコミュニティ FM の DJ の出会いから始まったラジオを活用したプログラムを行い、地域既存の発信設備を資源として活用することによって、若者にとって創造性発揮の機会を創出し、「そこで生きざまの提示を行った」と言える。

「心のままアートプロジェクト」は、障害を持つ子の親たちが中心になって行った、こどもたちがアーティストと共に大きな窓に絵を描き公共施設で展示したプログラムであるが、こどもたちがいつのまにかネット企画会議にも現れ、主体的に参加するようになるなど、与えられた場を超えた創造性がこどもたちにあることを証明してみせた。

また、芸術祭等の事業は、作品やそのものを見せるだけが目的ではなく、作品を通して浮かび上がる地域性やその暮らしの創造性、人に目をむけようとする取

り組みであり、ときに「多様な生き方」がもたらす面白さ、発見する視点を、アーティストと呼ばれる人々が作品を通して提示することがあった。

④文化・芸術を、地域的・社会的課題への対応に生かします。

現在、中山間地においては過疎化、市街地においても商店街の空洞化などの地域課題が、また、社会課題としてはすべての人がお互いを認め合う社会包摂など、様々な課題が山積している。文化プログラムには、このような課題に対して文化・芸術の力で少しでも解決に近づくことができるのか取り組んだいくつかのプログラムがある。

前述した「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」は、まさに過疎化の象徴的な「無人駅」をステージとして、交流人口や関係人口を創出することに成功した例と言える。



Scale Laboratory



おべんとう画用紙



しゃぎりフェスティバル

また、廃業した沼津市のデパートの旧催事場を、パフォーミングアーツのステージとして活用した Scale Laboratory のプログラムは、中心市街地に新たな顧客を産み出したと言えるのではないかな。

また、社会福祉法人ひかりの園でのプログラム「おべんとう画用紙」は、年少の子供たちがこんなお弁当を食べたいという絵を描き、親がその絵に基づき実際のお弁当を作るという試みだが、「おべんとう画用紙」を創作物と捉えるというよりも、親子間のコミュニケーションの促進や、閉鎖的になりがちな療育施設を社会に開く、という意義があった。

さらには文化そのものにおいても、長い年月伝えられてきた伝統芸能について、その後継者がいなくなるという課題も生じている。三島市の「しゃぎりフェスティバル」は、将来を見据えた様々な試みにより課題に向き合うだけでなく、コロナ禍にあって独自のマスクを開発するなど、柔軟な対応により乗り越えたことは特筆される。

まとめ

5年間に渡る静岡県文化プログラムの活動をふりかえり、非常に困難な事例と言われている文化事業の検証を、その目的の達成という面から試みてみた。

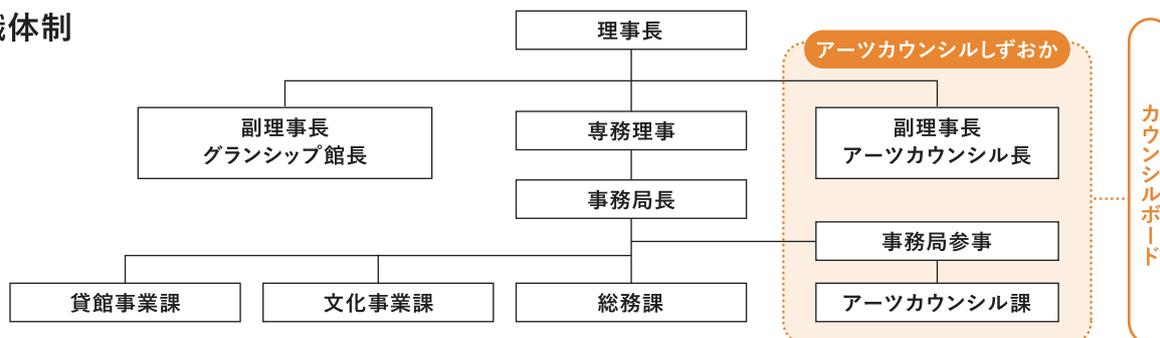
もちろん、目的以外にも、コロナ禍という文化事業にとって非常に厳しい状況下で、プログラムを実施するために、各種のマニュアルや前述した独自のマスクなど、様々な創意工夫で対応したことは、また、このような事態に陥ったときの良き事例となりうるものであると評価できる。

ふりかえって、全てのプログラムについても目的を達成したかという視点で捉えるならば、総じて評価できるという結論を得た。改めて、5年間の長きにわたりプログラムの実施にあたった関係者の皆様に、この場を借りて感謝するとともに、レガシーとして令和3年1月に誕生した「アーツカウシルしずおか」が、文化プログラムの成果を土台として、静岡県の文化の新たな時代を築き上げていくことを期待したい。

アーツカウンシルしずおか

「アーツカウンシルしずおか」は、実践的専門家による支援、負担金による支援、他分野との協働等の静岡県文化プログラムの実績をレガシーとして継承し、文化芸術の力を活用して地域社会の活性化を目指す住民主体の活動を支援し、創造的で感性豊かな地域社会の形成を促進するため、2021年1月公益財団法人静岡県文化財団内に設置しました。

組織体制



開所式の様子



パンフレット

アーツカウンシルしずおかの主な業務

高い専門性を持つスタッフを配置し、「住民主体の創造活動の推進エンジン」、「他分野協働のプラットフォーム」、「文化政策シンクタンク」の3つの機能を担います。



主な事業内容

住民主体の アートプロジェクト支援

- 助成、伴走支援 ※1
- 住民プロデューサーの発掘
- 先導的な事業の試行

コーディネート

- 相談窓口
- セミナー、講演会などの開催 ※2
- 企業・団体・大学・自治体とのネットワークづくり
- アーティストとのマッチング

調査研究・政策提言

- 地域資源・文化活動の調査研究
- 自治体、文化団体などへの助言・提言

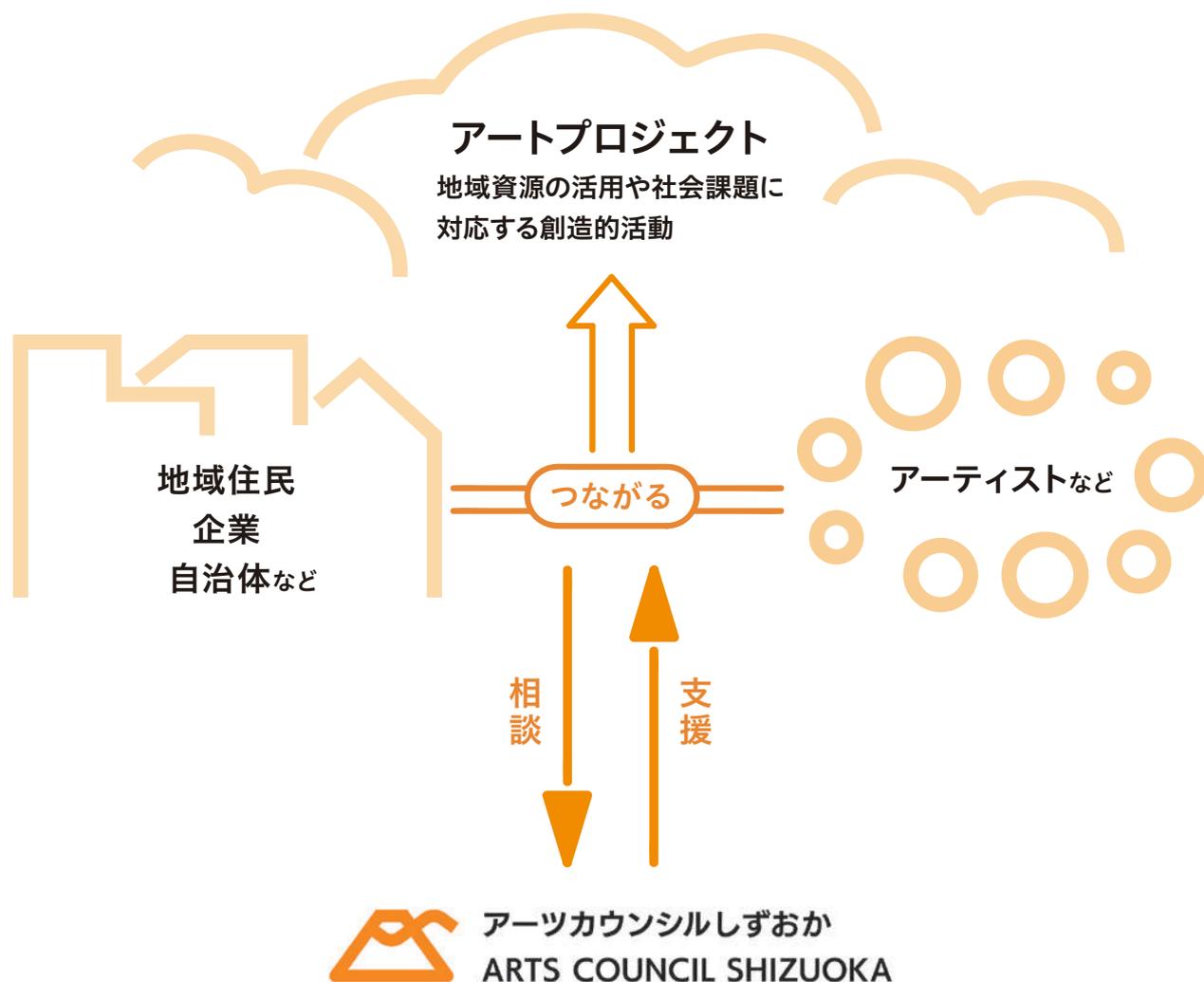
※1 助成金による支援と共に、プログラム・ディレクター、コーディネーターによる助言や事業内容の整理などの伴走支援を行います。

※2 創造的活動のヒントになる示唆に富んだトークや事例の紹介をします。

アーツカウンシルしずおかの役割

“視点をかえる 発想をひらく”をキャッチフレーズに、地域資源の活用や社会課題に対応する住民主体のアートプロジェクトの支援を中心として、すべての県民が、様々な表現活動を通して創造的になることを目指し、そのための方法を開発し、制度を整備します。

誰もが持っている創造力が活かされる道をひらき、まちづくりや観光、福祉、教育など社会の様々な分野においてイノベーションが生まれる創造的な地域づくりに貢献します。



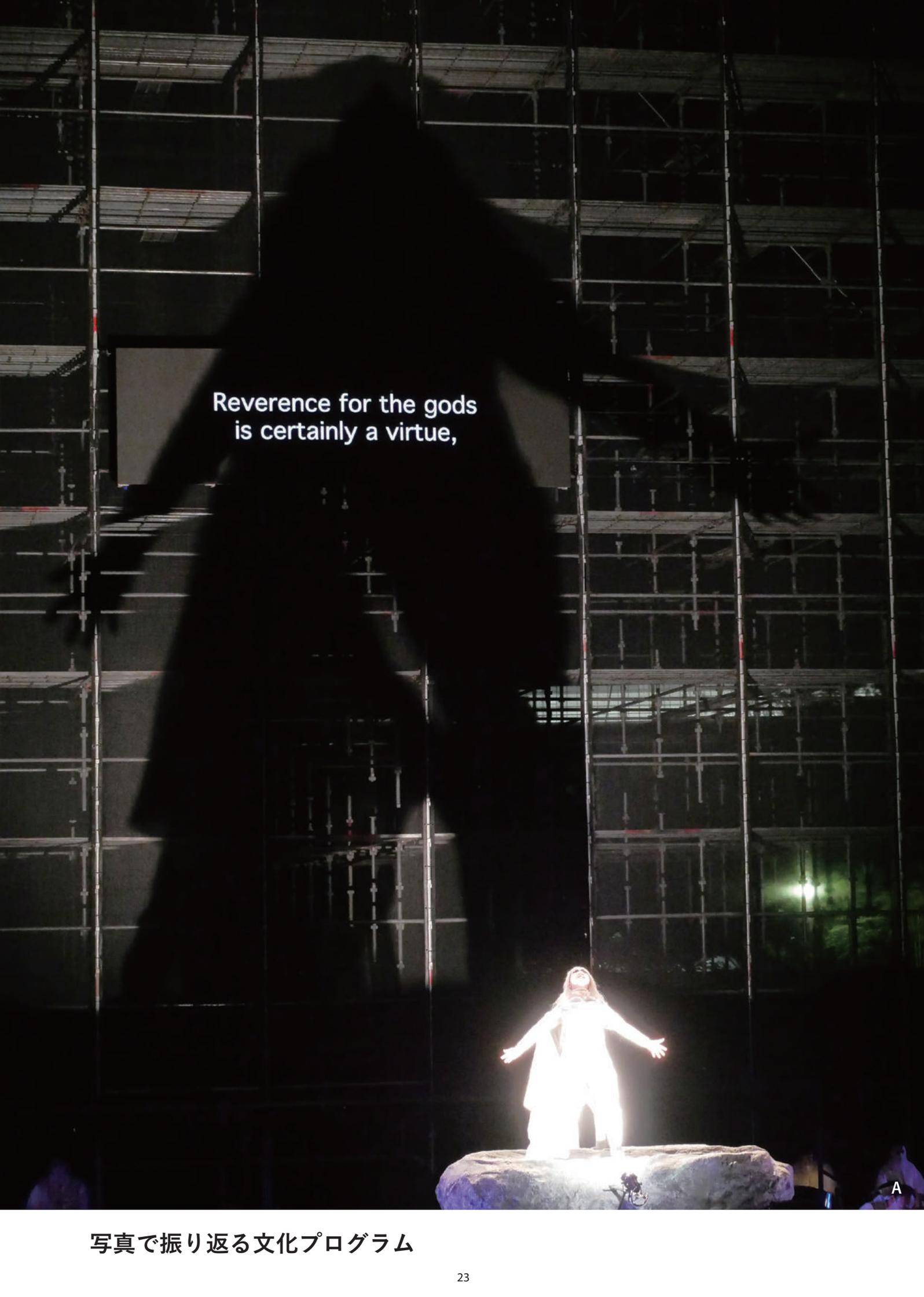
アーツカウンシルしずおかのロゴについて



アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA

Arts Councilの“A”そして静岡の象徴“富士山”を想起させるモチーフに、アーツカウンシルしずおかの母体となった静岡県文化プログラムのシンボルを合わせたロゴマークです。

「文化芸術の力を活かした住民主体の活動を促進する」というアーツカウンシルしずおかの設立主旨を念頭に、富士山のモチーフを踏切板に見立て、「ここから新たな一歩を踏み出す」「次の段階へ跳躍する」といったイメージも表現されています。

A person wearing a white, long-sleeved outfit stands on a large, dark rock in the center of the frame. The person's arms are outstretched, and they are illuminated from below, creating a bright glow. The background is a dark, complex structure of metal scaffolding or a stage set, with a grid-like pattern of vertical and horizontal beams. The overall atmosphere is dramatic and somewhat mysterious. In the bottom right corner, there is a small white letter 'A' next to a person's head.

Reverence for the gods
is certainly a virtue,



B



C



E



D



F

A_宮城聡演出 SPAC公演『アンティゴネ』©HIRAO Masashi B_松崎町「絲」concept
 C_WABISAVILLAGE SASAMA - 視点を変え、文化の力で持続可能な村作り -
 D_UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川2019 E_伊豆のODORIKO フェスティバル F_富士の山ビエンナーレ2020





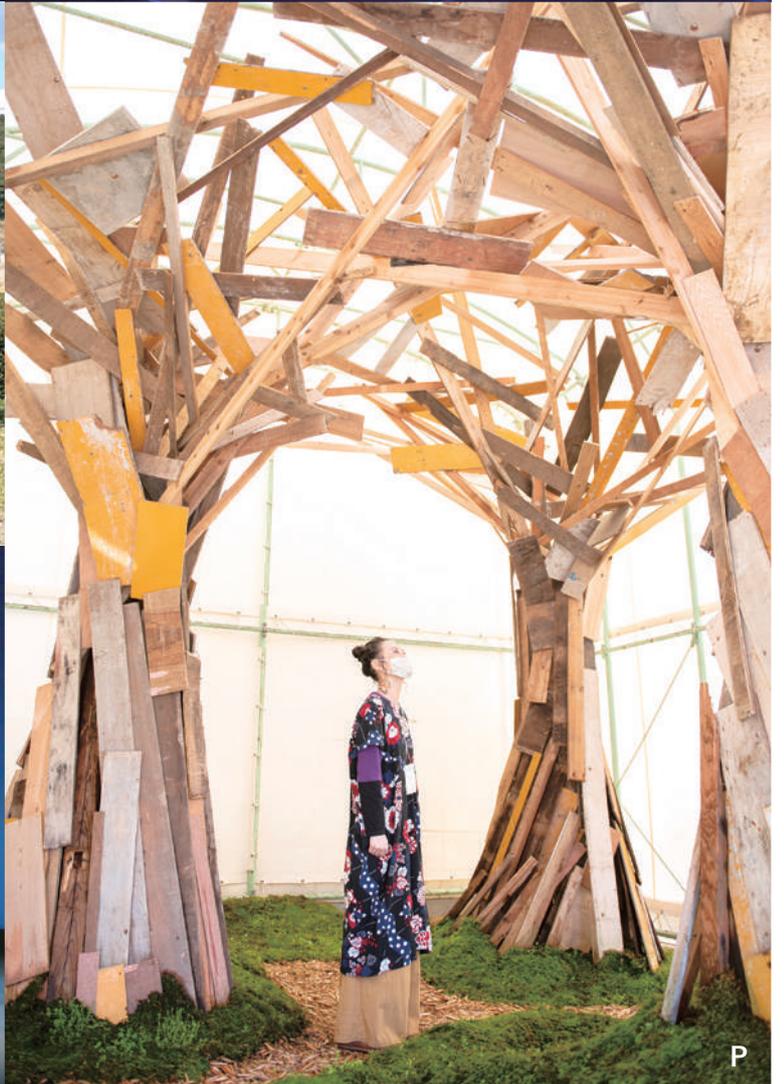
M



N



O



P

G_第4回しゃぎりフェスティバル H_UNMANNED無人駅の芸術祭/大井川2019 I_となりのアーティストプロジェクト～地域を拓き、可能性の扉を開く～
 J_磐田プレ公演 ララバイ 詩と舞踊と音楽による小宇宙 K_遠州森町の舞楽・舞楽食～食文化～次世代に繋ぐ～ L_想像する展覧会～原泉アートデイズ! 2020不完全性～
 M_『忠臣蔵2021』©Y.Inokuma N_UNMANNED無人駅の芸術祭/大井川2019 O_舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」 P_富士の山ピエンナーレ2020



Q_富士の山ピエンナーレ2016 R_となりのアーティストプロジェクト～地域を拓き、可能性の扉を開く～
S_新時代の「課外活動」への挑戦!～地域部活・掛川未来創造部 Palette～ T_タイムスリップ! 1964
U_パラリンピック聖火リレー出立式 V_熱海怪獣映画祭 W_磐田プレ公演 ララバイ 詩と舞蹈と音楽による小宇宙
27

静岡県文化プログラム成果報告書 2015-2021

2021年12月発行

発行 静岡県文化プログラム推進委員会
(事務局：静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化政策課)
〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町9-6
TEL:(054)221-2252